英語教師のための
基礎講座

Team-Teachingの基礎・基本 1
—心に留めたい 4 つの視点—

渡邉時夫　Watanabe Tokio
（清泉女学院大学）

Fresh from college といった若い先生を含め，native speakers との Team-Teaching に比較的経験の浅い先生を対象に，できるだけ具体例を挙げながら話を進めることにしたい。4 回のシリーズの内，最初の 3 回は主として Base school を，最後の 1 回は，One-shot visit の状況を仮定して述べる。

視点 1　あなたのALTをよく知ること

ALT は「異文化の生きた教材」などと言われている。その「生きた教材」をしっかり学習することが基礎基本。ALT の生きてきた背景，個人的な特徴や魅力，日本についての考え方など，しっかり聞いておくことである。

教職歴が比較的浅い者にとっては，英語による情報収集の実践的な訓練にもなる。口頭で聞いた後，ALT に話の内容を文章にまとめてもらっておくことを薦めたい。Spoken English と Written English の違いや organization などについて勉強になるだけでなく，後日授業に使える内容が蓄積される。

一例として筆者の経験を挙げてみよう。長野市内で英語を教えているカナダ人男性 Greg Birch が相手だ。まず，生徒にとってなるべく新情報となるようなカナダの様子を話してもらった（あなたなら，どのように聞き出しますか？この部分が先生にとってよい communication practice になる）。

話の内容をまとめた文章の一部を紹介しよう。例えば，カナダについてこんなことがわかった。

① Many Japanese people think that because I am Canadian, I am used to cold weather, but Nagano is colder than my hometown(Vancouver). Vancouver is near the ocean, so it has a mild climate. However, it rains a lot in Vancouver between September and March. I love the winter in Nagano because it rarely rains.

② In Canada, I thought it was normal to have a friend whose parents were Chinese, Indian or European. We never really thought about it. I was fairly surprised to learn that there are very few immigrants in Japan.

③ I only went to two schools, an elementary school (kindergarten to grade 7), and a high school (grade 8 to 12). We never received school lunches. We had to bring our own lunch.

④ I started to study French in grade 5. Although two languages are spoken in Canada, I never had to use French in Vancouver.

NEW CROWN 3 年の LESSON 2 は，ちょうどカナダ人との interview を取り上げている。テキストではカナダのことにはあまり触れていないので，Team-Teaching では，生徒の前でこのような情報を彼から引き出すとよいだろう。

また，上記③は，*NEW CROWN* 1 年の LESSON 6（School in the USA）で，school lunch を話題に，日米加の比較に活用できる。

視点 2　ALTの役割 q

「生徒にわかる英語」を話す
—Listening の大切さを強調—

ALT の中には，特に日本の英語教育に慣れない内は，生徒に「話すことを強要」する者が多い。人前で話すことに大きな抵抗を感ずる生徒は意外に多い。心理面だけでなく，「聞いて理解する力」が英語習得の土台になる。また，聞く力には，生徒の個人差が少ないこともあり，聞く活動を大切にした授業は，「英語好き」を生み出す可能性が大きい。聞く力の成長を見ながら，徐々に英語を話させる機会を増やすことが大切である。このことを納得してもらうことが重要である。

そのために ALT は，「生徒にわかりやすい英語」

を話すことが求められる。このことは結構難しい。どうしたら，そのような英語が話せるのか，英語教育の経験が浅いJTEにとっても課題のひとつである。ALTは，もともと英語を使う力量があるので，意識してそのコツをつかめば，たちまち上達するのが一般的である。そのコツの具体例を少々挙げてみよう。

①Contrastを使いながら話すこと

例えば，AustraliaのChristmasについて話す場合。

In Christmas season, in Japan it is winter. It is very cold. In Australia, it is summer and it is very hot. In Japan it snows a lot but in Australia there is no snow. Santa Claus comes to Japan on a sleigh. But how does Santa come to Australia? He comes on a surf board.

② 抽象の「はしご」(ladder of abstraction) を上り下りしながら話すこと

最初に紹介したGregは，カナダの人口密度に触れた部分で次のように書いている。

Although Canada is very large, the population is very small. In fact, the population density of Canada, or the number of people per square kilometer, is very low. For every square kilometer, there are only about 7.7 people. In Japan, 850 people live in the same space.

抽象から次第に具体へと「はしご」を降り，最後はcontrastを用いて説明している。このような例を示して，ALTの理解を得ていくことを勧めたい。

視点３　ＡＬＴの役割 w

「気づき」(awareness) に敏感になる

英語を学びながら，様々なことに「自ら気づく」生徒の力を伸ばしたい。そのためにはALT自身が，教科書の題材や日常生活の中で，常に「気づき」に敏感になるよう理解を得ておく必要がある。ALTには次のような具体例を話したらどうだろう。

①Australia出身のALTがSanta Clausの話をした時に，Santa comes to Australia in shorts. と説明した。その後What does Santa wear in Australia? と確認したところ，生徒の答えは，Short pants. だった。しかし，ALTのreactionは，“No.”と言っただけで，授業が先へ進んでしまった。Japanese Englishにこの ALTが気づかなかったために，生徒は貴重な学習の機会を逃してしまった。

②JTEが，“There are many animals living in the mountain.”と言ったところ，米国の西部出身のALTは，“Many animals live on the mountain.”と言い換えた。樹木のない，裸の西部の山を連想したALTにとって，live in the mountainと言えば，「山の穴の中に住んでいる」ことになるそうだ。ことばの使い方をきっかけに，文化の違いについて「気づいた」わけである。このような例を示しながら，ALTには，いろいろな事柄に「気づかせる」材料を日ごろから蓄積しておくようにお願いすることが大切である。

③*NEW CROWN* 2年のLESSON 2に，ムカミがThere I met many people. Some of them spoke different languages from mine. と説明している箇所がある。

Gregの次の説明文中のmany peopleとムカミの言うmany peopleとの違いに気づき，わかりやすく説明できる力をALTには求めたい。

In my hometown, there are many people from different countries. They speak different languages.

Gregの場合は，immigrantsだが，ムカミの場合は，Kenyans（同国人）。その違いは大きい。

視点４　あなたの授業の特徴をしっかり伝える

ALTとのTeam-Teachingにおいて，毎回teaching procedureを変えるようなことはせず，ある程度固定し，それぞれの段階 (step) でALTに求める活動の種類などを一定にしておくことが得策である。例えば，次のような授業過程が考えられる。

Warm-up(Game, Song, etc.) ⇒ Review (Skit, Q-A, Recitation, etc.) ⇒ Introduction of new section (Skit-like presentation, Comprehension check, etc.) ⇒ Presentation of new materials (Grammar points, New words, etc.) ⇒ Practice of new linguistic items ⇒ Communication practice ⇒ Consolidation

次回は，「ALTとともに鍛えたい力①—生徒を引きつける英語のインプット」をテーマに，教科書に触れながら，具体例を紹介したい。